ひとりごと

「あの瞳をくもらせないように」

5月皐月。新緑の明るさに心躍る季節である。しかし、小学校での教員生活を20年以上過ごしてきた私にとって5月は、ある苦い思い出を思い起こさせる季節でもある。

5月は進級、進学で新しいクラスに緊張感をもっていた子どもたちが少しずつ慣れてきて、関係性や雰囲気が変わってくる時期である。また、「五月病」の言葉があるように、大型連休を過ぎたころから体調や心を崩しがちな子どもたちもいる。多くの教員や教育関係者はこの時期の子どもたちの様子をしっかりと把握し、不登校やいじめの未然防止に努め、よりよい学級経営につなげていくのであるが、講師2年目のあの時の私には、その力が足りていなかった。

当時勤務していた学校では、担任や話しやすい先生に悩みや困っていることを個別に相談する時間をとる「教育相談週間」を行っていた。大型連休明けの5月に「教育相談週間」を行うことで、子どもたちの様子や関係性の変化に気付くことを目的としていたのである。

私は自分のクラスのあるおしゃべりな男の子と話していた。彼から「友達関係」や「家庭環境」などいろいろな話を聞いていたが、次の子どもの相談時間が迫っていた私は、「じゃあ、特に問題はないね」といって話をうちきってしまった。その瞬間、彼の瞳がスッとくもったように感じたが、当時の私はそれに気が付くことができず、別の児童を呼んで「教育相談」を続けてしまった。

彼はその後少しずつ休みがちになり、学校に来ることができなくなってしまったのである。今から考えれば、「友達関係」の話の中ではクラス替えで一番気の合う友達と離れてしまったことをほのめかしていたり、「家庭環境」の話の中では親が彼の兄の話ばかりを聞いて、自分の話を聞いてくれない不満を伝えたりしていたことに思い至る。「じゃあ特に問題はないね」と話を打ち切られてしまった彼は、私に対して、ひいては教員に対してどんな思いをいだいたのだろう。その後、彼は社会人になって働いているということを人づてに聞くことはできた。しかし、あのときの彼の瞳のくもりを見逃してしまった後悔の念は、今もずっと残っている。

今、教育現場を離れ、文部科学省で派遣研修生として過ごしている。日々、情熱をもって真摯に職務を全うする文部科学省の職員の姿は、全国の教職員、教育委員会、そしてなにより子どもたちのためであると改めて感じている。大きな法案や教育行政の先には、一人一人の子どもたちがいるということを改めて考えさせられた。

一人一人の子どもたちの「あの瞳をくもらせないように」、教員も教育関係者もみな一生懸命に働いている。それを少しでも支えていけるように私自身これからも研鑽を続けていきたい。

爽やかな五月の風を感じながら、苦い思い出を思い出しつつ誓う。

（M.F）

「教育委員会月報　令和７年５月号　No.907」

・**発行・著作** 文部科学省初等中等教育局初等中等教育企画課
・〒100-8959 東京都千代田区霞が関 3-2-2
・TEL：03-5253-4111（代表）
・URL：https://www.mext.go.jp

文部科学省